

三藤さんが佐々木さんと信頼関係を築けた背景には、三藤さんがJAしまね島根おち地区本部の活動を紹介する。

若手農家のネットワーク

三藤さんが佐々木さんと信頼関係を築けた背景には、三藤さんがJAしまね島根おち地区本部の活動を紹介する。

会うほどに信頼を深め、担い手の声をキャッチ!

—— 島根県 JAしまね島根おち地区本部 ——

現在、そして未来の地域農業を支える担い手。その声を集め、経営に役立つ情報提供や提案、JA事業への反映を行うTAC(地域農業の担い手に向くJA担当者)の活動の要は、日々の訪問活動にある。不安や戸惑いが大きい新規就農者を支えるJAしまね島根おち地区本部の活動を紹介する。

鈴木千佳=写真 photo by Chika Suzuki JA全農TAC推進課=企画協力



写真左から、三藤さん、佐々木さんの祖父・保男さん(87)、佐々木さん、澤津さん。経営は別だが保男さんも農業を営んでおり、孫は頼もしい存在だ

コーディネーター×自身の経験で強力なサポート

三藤さんは、担い手を訪問するなかで、TACのニーズは、JAの営農指導員や行政の担当者などに担い手の質問や情報を素早く的確につなぎ、多方面からの回答を整理して伝えることに気づいた。必要に応じて専門知識を持つ人を現場に呼んで、担い手に紹介することもある。自身は、10年以上所属した信用部門での経験を生かし、借り入れのさいの経営計画策定などでサポート。佐々木さんは、トラクターなどの設備投資を計画的に進めている。

JAしまね島根おち地区本部

島根県の中央、広島県との境に位置し、邑智郡邑南町・川本町・美郷町、江津市桜江町を管内とする。「石見高原ハーブ米」の『コシヒカリ』と『きぬむすめ』のほか、白ネギ、ナス、ミニトマト、広島菜を重点品目として取り組む。花卉は県内品評会での評価が高い。TACは2人態勢で100戸の担い手を訪問する。



担い手とTAC“いい関係”の作り方



イラストはJA全農TAC推進課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

日ごろから担い手の出合いを増やす提案を

同じ地区に同世代や、類似する経営の農家がいなかった三藤さんは、農機の展示会などのJAの行事があると、資料を現場に持ち寄り、口頭で説明して参加を勧める。営農の都合などで参加できなかった場合は、後日様子を報告しているそうだ。青年連盟の学習会では、地域をまたいで班分けをするなど、佐々木さんが地域外の仲間を自然につくれるよう工夫した。



TAC一人が訪問する農業経営体の数は、全国平均で約四五、担い手一経営体当たりの面談回数は、年間八・二回(二〇一七年度実績)にのぼる。日々の訪問活動に重きを置くのは、担い手とTACの信頼関係が築かれて初めて、情報や課題を共有し、最適な経営提案を行うことができるからだ。JAしまね島根おち地区本部管内では、ここ数年、毎年一〜二人のペースではあるが、I・Uターンによる新規就農者が着実に増えている。彼らが、将来にわたって営農を続けていくためには、早い段階で、経営のビジョンを持てるかどうかがかギになる。JAの営農企画課係長でTACの三藤晃生さんは、新規就農の担い手を担当している。「行政の担当者と毎月会議を行い、新規就農者の情報を共有したうえで、訪問活動を進める体制です。でも、先入観を持ちすぎず、新規就農者の口からこぼれる不安や本音を聞き漏らさないように気をつけてい